

# 經濟論叢

第十八卷 第四號

---

神戸正雄博士  
八十歳祝賀  
記念論文集

---

昭和三十二年十月

京都大學經濟學會

# 邦国経済の道

作田 莊 一

## 一、道 別 け

わが国では、明治以前まで行はれてゐた私別労働企業の体制を廃止して新たに西洋から私別資本企業の体制を移植し、これが今まで九十年間続いてゐる。そしてわが邦国経済（国民経済）の道を学ぶ者は、殆んど全く自由個人主義の西洋経済学説に追随してその学習に努めて来た。然るに西洋にて正統と認められた資本主義経済学に反抗してその批判が起り、ロシアが率先して共產社会主義を執つて公共資本企業の体制を打建てるに及んでは、正指定制に対する反指定制としての社会主義経済学が現はれたが、これがまたわが国では熱心な追隨者が輩出してその学習に努めてゐる。然るに本場の西洋諸国では、個人主義と社会主義とが対立してゐても、その学説はそれぞれ自國産のものであるだけに、どこかに邦国経済の筋金を通してをり、自由主義を執つても邦国経済の骨髄を崩壊してゐない。経済歴史学や経済国策学は無論の事、経済理論学であつても人文学・歴史科学である以上は、そこに「邦国」の骨髄が存して、我が国と彼の国とを混同することは学問の約束において許されない。従つて資本主義経済体制が西洋から我が国に移植されたものであつても、その後は我が国に育つものであるから、謂ゆる「原書」がそのままに

我が国に役立つ筈はない。ましてや全く移植されてゐない共產主義經濟体制の學説が、道理としてわが邦國經濟に貢獻する筈はなほさらない。然るに他國の學者から、共產主義圈以外の國にて共產主義學説の學習が最も繁昌してゐる國は日本だと言はれて見ると、麥な氣がする。それだけ我が國では本格的な日本經濟學の研究が例外となつてゐるのであらう。西洋から移植した學問であつても、地物科學は人間對地物の研究であるから、今の我が國では學習だけに止まらず、已に研究の域に出てゐるものが少くない。然るに人文科學となれば、諸國共通の面よりも各國特殊の面に高く評價される文化が現はれてゐるから、この部門における移植の學問はまだ進歩の見るべきものがない。邦國經濟の道の如きは、その振はないものの一つである。

邦國經濟の道と言うは、一体又は總体を成せる邦國生活の經濟面について、何を爲し如何に爲すべきかの方途並にその拠り所を指す。ここでは邦國そのものが道主となり、その表現者たる國家意志が道を決定し実行する當局者となる。道の考案は何人でも出来るが、邦國の道として実行に上るものは必ず國家意志力の動きに須つ。従つて従来の社會經濟學が研究主題として探求して来た經濟理論の如きも、これをわが國家意志の立場から社會法則として取挙げる場合において邦國經濟の道に加つて来る。たとへ我と彼との邦國經濟に共通の場面を多く持つてゐる場合でも、これに囚はれてわが邦國經濟の特徴を輕視するならば、思惟が精緻になればなるほど精密なる觀念の遊戲に墮する。今の風潮で言へば、諸國の生産體系には私別資本企業制と公共資本企業制との二大類別が見られるが、これらの對比批判と言うだけではどうにもならない。經濟体制と言へども、その根基となるものは具體的國性であり、これから山登したものでなければ、邦國經濟の道と言つても真正味は脱落して了う。我等は実存する日本邦國經濟の道を求める。それをこれから道別けして考へて見よう。

人の生き行く道には四つの道が道別けされる。道別けと言ふは、道そのものの内容を問はず、ただ種々の道についての品定めてあり、ここでは人生の道についてそれぞれの道の任務又は職分を見別け見定めることである。さうした道別けについて我々は、「由る道」、「執る道」、「乗る道」、「踐む道」の四種別を打立てる。その中にて最も身近く取挙げられる道は「踐む道」であり、古語の「道」も両脚にて歩む道から始まり、それから行先きを示す道を含ませ、段々と広く人の生き行く道一般に拡がつた。四つの道の中にも現前の「踐む道」が最先きに意識せられ、それから段々と他の道が引出されて行く。

踐む道に次いで意識に上ぼる道は「由る道」である。我々が道を踐むに當つて念頭に浮ぶ感想は、果してこの道を踐めばよいかと言ふ疑問である。これを明かしてこれが真さしき道理と正だしき道義に適つた道であることを確かめたとき、始めて気勇ましく心安らかに道の実践に出発し得る。かく由つて生き行く道が即ち「由る道」である。由る道は踐む道の由つて来たり拠つて立つ高階段の道であり、実践に示命を授け、実践者をして遵守せしめる道である。由る道が意識に上ぼるとき、人は由つて踐むと言ふ道念を懐く。

由る道に次いで意識に上ぼる道は「乗る道」である。踐む道に由る所があれば、それが真さしき正だしき道を踐むことの奥書きとなる。しかしそれだけでは「御授け」があるのみにて、これとは別途に、踐む道の進行が果して目的を達し得るかどうかを保証する裏書きを必要とする。それが乗る道である。我等は彼の道に乗つて此の道を踐むとき、願念の実現を期することが可能・有効となる。由る道と乗る道とは紛れ易いが、由る道は実践者の頭上に立つて踐む道を導き、乗る道は実践者の脚下に控えて踐む道を支える。一には遵守し由拠し、二には依存し依乗する。

生活が単純であつた古代には、踐む道も単純であり、それだけ乗る道などは深く注意されなかつた。近世となり交通が開らば願望が拡充され、踐む道が分化して複雑となるにつれて、これらを可能・有効ならしめる乗る道が強く要望されて来た。これが殆んど爆発的に振ひ起つたのが地物科学であり、これに追隨したのが社会科学である。かかる諸科学の法則が乗る道に収められるとき、踐むところの願念の実現がユートピアから脱出して来る。我等は乗つて、踐むのである。

道別けの中にて最後に意識に上ぼるものが「執る道」である。これは最も気づき難い型の道であるが、これを明確にしないところに踐む道の真偽・正邪を曖昧ならしめ、異説間の了解を妨げて果てしない思想闘争を惹き起こす。執る道と言うは、道の実践者が自ら立つてゐる位置を自覚し、何者として道を踐んてゐるかを意識し、その位置から何処を目指して進み行くかの向途を自識することである。それは実践者の立場と目当とを明かにする道であり、実践者が現に占めてゐる生活の場から前に進み行く目標を見定めることである。かかる執る道は気づき難く最後に意識に上ぼるが、考へて見ればそれは何人の何の活動でも必ず具えてゐなければならぬ道の型であり、それがあまりに身近い故に却つて燈台下闇して思ひつかないわけである。古代・中世までの学問は主観に傾いてゐるので、執る道が重んぜられたが、客観に傾いた近世の学問では執る道が忘れられ、大切な主体性がぼかされて来た。現代の学問は主観にも客観にも偏らず、二者を連らねる通観を経て綜観に達しようとしてゐる。見て考へる立場は主観の側であり、見られ考へられる目当は客観の側であり、二者を連らねる視線・思惟線が通観の途を開らいて綜観に持つて行く。ここに道の実践に先立つて主体が決執される道即ち執る道が要請せられ、そして執つて踐むのである。

以上、人の生き行く道の型について我等の意識に上ぼす順序より見て、踐む道、由る道、乗る道、執る道を列挙

したが、見地を変えて論理的に道の任務から見て行けば、由る道、執る道、乗る道、踐む道の順序となる。人の生き行く本の道となるものは由る道であり、これは高次の道理に裏づけられる高次の道義であり、すべて人生の踐む道はここに由拠しここから發起する。由る道によつて執る道が定まる。これも道理に裏づけられる道義である。由つて執るところに執つて踐む道が決められる。これに伴つて踐む道の進行を確実ならしめる為に乗る道が求められ、その支持を得て乗つて踐む道が最後に確定される。乗る道は道理であり、踐む道は道義であり、乗つて踐む道が合理的と言はれる。かかる四つの道別けは人生のすべての方面に通ずるが、邦国経済の道を求める場合にも如上の道別けに従つて道の吟味を試みる。しかしそれは単に人生一般の道を経済生活面に演繹したわけではない。人生一般の道から邦国生活の道に、更にそれを邦国経済の道にと、一々現実態の分化を跡づけて吟味して見るとき、ここにも四つの道別けによつて是までの学説を批判し、これからの研究を打出すに有力なる規準が与えられる。殊に世間生活面において圜境を無視した空想が、学説の外形に包まれるところから持て囃やされるやうな風潮に対しては、これを是正する規準となるものが強く要請されるのである。

## 二、由る道

邦国経済の踐む道である経済国策の決定は、必ず邦国経済の由る道を前提とすべきである。その由る道は一般には邦国毎に定まれる国是であるが、日本邦国経済の由る道は日本の国是に外ならぬ。国是と言うは、邦国生活においてその経歴と志向とを通じて定まり、国の統治及び経営を行う基本となるところの、自立的・具体的な道義を指し、それは国の経歴に存する道理によつて裏づけられる。他国の国是はこれを外から推察するだけであり、他の国

心に代位移入して内観しても間接観に止まる。然るに自国の国是となれば、国人みづから国心を以つて直接に邦国生活の経歴及び志向を内観し得るが故に、その認識を深めるにつれて国是の何なるかが国人の意識に上ぼつて来る。わが国には肇国以来幾千年を経て成長し固成されて来た道統があり、これが国性・国本・国体・国業・国運・国位に亘る国是を樹立して今に到つてゐる。この整つた国是振りは、太平洋の孤島に国を成して自ら護りつつ他国の文化を受け容れ得る地理上の事由を基底となし、その上に住める日本邦族が奇しくも遠古に打出した邦族固有の人生、開化道に由来するものと思はれる。この国是は肇国の当初に日本邦族が心の奥底に直覚した本命を確持し伝承しつつ、これに外から移植した種々の文化を改良して、長い経歴の間に開展しつづけた道統によつて支持されてゐる。但し歴史上始めての対外敗戦はわが伝統の人生道にまでも痛手を加えてゐるが、しかしこの最初の大試練に耐え得たならば、却つてそこに深い反省が加えられて、歴史を貫く国是を維新するに違ひない。

日本邦国経済の由る道となる国是は、国性の一なる邦族の勤勉性を基底に置き、国本の重点たる人生、開化の本命を信奉し、これを實現するに當つては、国人が一体・一系を成せる国体に立つて、開化を進める国業を営むのであり、これが弥栄の国運を齎らすこととなる。人生の目的は、身命を保つ望、幸福を享ける望、平安を全うする望及び開化を進める望の四階段を登つて往く。日本の道統は最初の内容こそ未開粗放であつたが、始めから最高階段の人生目的を懐いて出発した。この粗放な内容を精純なものに仕上げて行くことが国是となつてをり、決して開化道から低階段の幸福道に墮落してはならない。封建時代に職業階級を「士農工商」に分けたのは、道統の示せる人生開化の道に添う生活振りを基準としたのであらう。それが今では商業のみであつた幸福道の功利主義が工業を風靡したが、農業は特有の生産・消費事情からさまで功利主義化してゐない。却つて「士」の階級に該当する政治家・

官吏・教師・學者・文士などが古風の開化道を忘れて、人生目的は幸福にあるなど公言してゐる。これは西洋から来た人の道（ヒューマニズム）の人生觀に転向したからである。功利主義の幸福道が期成主義の開化道を圧迫して来たのは、我が國が資本主義化した影響である。

然らば資本主義を眼の敵とする社会主義國は、何を由る道に載いてゐるだらうか。そんな事はマルクス、エンゲルスが一向に教へなかつたから、共產革命を仕遂げたレーニン、スターリンも困つて過誤と修正の試練をつづける外はなかつた。そこで近代産業の建設がほぼ成るまでは、單に「必要」を由る道となして未開發資源に向つて國民を強制的に使役して来た。産業建設の見通しがついた頃からは、時々「創造主義」の言葉が出たので、これならばわが古道に近いと思つたが、しかしまた幸福道から飛躍した高次元の由る道とはなつてゐない。かやうに社会主義國の經營には由る道が見つかからないが、社会主義國に進出する革命運動を導くところの由る道は、マルクスから与えられてゐる。それは唯物史觀法則である。共產革命は個人らの組合つた無産者政党の手にて行はれるが、個人意志を超越する社会自然力（自然力）の動きである唯物史觀法則が無産者政党を導くとなすところに、革命運動の由る道となる。しかしそれは革命後の邦國經濟の由る道とはなり得ない。しかも共產社会主義が成功すれば無産階級國家すらも消滅するとなれば、その後はもはや何の由る所もなくなつて、個人が自ら由るのみとなる。これは人の道の理想の一種であらうか。

権力宗のマルクスは却つて個人自ら由ることを極致とする。自由主義のスマスは却つて神の摂理に由るとなす。わが邦國經濟の由る道は國是に随つて、個人の我が儘を許さず、一体一系を成す國人が、本命とする開化の道を進むにある。そこに二宮尊徳や佐藤信淵の經濟觀が回顧せられる。



## 三、執る道

邦国経済の由る道はその実践活動にとつての由拠となるが、同時にまた邦国経済の執る道を打出す根源ともなる。その執る道は踐む道即ち経済国策を考案し決定するに當つての立場と目当とを確定する道であり、これが由る道を受けて踐む道に出る基地となる。先に述べたやうに現代の學問は主観と客観とを連らねる通観を経て綜観に達しようとするが、その通観を可能ならしめるものは、研究当体の立場と目当とを繋いで、何者として何事を見るかを確めるところの執る道に外ならぬ。科学には国境がないが、科学者には国籍があるといはれるが、それは地物科学についてである。人文科学、殊に歴史科学・世間科学となれば、学者のみでなく學問そのものにも国境・国籍が存する。これまでの西洋経済學でも何国学派と言はれるものは、用意が甚だ不充分であつたと言へ、暗に国籍を持つた学者が国境を念頭に置いて研究して来たものである。唯だ謂ゆる世界普遍の真理なるものに憑かれたわが国の多くの学者が、無国籍の學習に耽り、果ては国境を見落す始末となつたのである。

日本邦国経済の執る道は、唯一の日本邦国意志、表現的には日本国家意志の立場に居て、日本国家の生成を豊かならしめ帰着を普からしめる事を目当とするのである。その事はむしろ常識としては当然と思はれるが、却つて客観に偏する近世科学となれば、執るべき立場や目当が曖昧となり、不注意な学徒は居場所を確めないままに、あらゆる方向を眺める錯覚に陥る。執る道が過つてをれば、必ず踐む道が間違つて来るのみでなく、乘る道さへも取捨の標準を過まつて乗り損ねる。日本邦国経済を運営する当体は日本国家意志であり、一々の企業の発起及び収果に當れる実業者は私別人格であれ公共人格であれ、邦国経済を一体として国家の生成及び帰着を計る大綱を掌握するも

のは、現実の日本国家であり他の何者でもない。

されどどの国でも国家意志力が邦国経済運営の大綱を引受ける実力を持たないか、或は持つてゐても国家自ら発動を制して企業実営を個人らの自由に放任する場合には、国家意志力が替つて社会自然力（自然力）の動きが、只然に邦国経済の運営に当ることとなる。邦国経済の運営が只然性の社会力に委ねられるか、意志性の国家力に握られるかによつて、邦国自然経済と邦国意志経済との差別を生ずる。計画経済は勿論、統制経済の時代となつた現代では、殆んどどの邦国経済でも已に意志経済となつてゐるが、しかし社会自然力の動きは大なり小なり依然として存してをり、これが次に述べる乗る道となる。かくて邦国経済を見るには、自然経済ならば暗に、意志経済ならば明かに、いづれにしても国家意志の眼を以つてし、その眼の着どころは一に国富の生成及び帰着である。これが正しい意味の邦国主義（国民主義）の見方・考へ方である。然るにこれまでの経済思想にはそれと違つた道を執るものが寧ろ多く、その相違が学派の大別を立てるまでになつてゐる。個人主義と階級主義とがそれである。

個人主義は個人経済でない邦国経済をも個人意志の立場から見、個人らの物質的幸福を目当とする。これは邦国経済の運営大綱が個人自由主義に委ねられた国及び時代の産物である。然るに各個人意志の立場から広大なる邦国経済の動きが見える筈はないから、看板は個人意志であつても、実は諸個人の意志を綜合化した立場である。これならば漠然ではあるが、或は要所が外づれることはあつても、ともかく邦国経済の只然相を眼界に映つて出出来る。されどかかる総合的個人意志の立場は觀念的なものであり、現実には社会の立場であり、社会は只然性のものだから見たり考へたりする立場としては、焦点のとれないレンズのやうなものである。かかる個人主義に反動して起つたのがマルクス流の階級主義である。これは無産階級意志の立場から社会経済を見るので、邦国経済を蔑

視する。これも始めは個人主義と同様に観念的なものであつたが、小人数ながらドイツに始めて無産階級政党が出現した時から現実の足場が出来た。個人意志を超越する階級意志の立場から共産革命を日当として動くと言ふ点は、論理的には合理性を持つ。しかしそれとても階級闘争運動にとつて正しいまでにて、一たびソ聯邦のやうに階級革命に成功せる後には、着色こそ紅白の違ひを見せても、中味は真さしく邦国経済であり、その執る道としてはそれぞれの国家意志の立場から国富を目当とする外には何もものもない。世界共産帝国主義の立場と日当となれば、問題は別である。

#### 四、乗る道

邦国経済の道の中に於て先きに述べた由る道と執る道とは、これまでの経済学が疎外して来たものであるが、ここに述べる邦国経済の乗る道は、その内容においてはこれまで経済理論として大に力を入れて考究し發展せしめて来たものである。されどその理論の任務如何については却つて等閑に付せられて、謂はば学問界の孤兒にされてゐる。そこでその性格を吟味してこれを邦国経済の乗る道と見定め、その任務を確める必要を生ずる。乗る道は踐む道に相伴する。道を踐むことは常に意識されるが、道に乗ることは然うでない場合が多いから、ここではつきりと乗つて踐むことを意識するとき、道の実践が確實となる。邦国経済の理論はこれまで踐む道に伴う乗る道として求められたのではなく、却つて踐む道たる経済国策の論説を学説でないと輕蔑して「真理の爲の真理」を標榜し、地物自然現象を説明する地物科学に見做つて、社会自然現象に對面する社会科学として發展して来た。それで善かつた。道理の研究は必しも道義を裏づける為と考へないで、それ自体を目的とするところに大なる効果を擧げる。同時に

踐む道を研究する者にとつて、道理や理論を乗る道として踐む道に伴はしめることも、一向に憚るに及ばない。例へば電氣物物理学はそれ自ら進歩して来たが、電氣工学はその物理学を乗る道に迎へる。経済理論の喧しい問題である価値法則・市面價格法則・景氣法則等々は、邦国經濟の道においては乗る道として招かれる。実践國策論は術であつて學でないと言つてこれを輕んじた父・ケインズの直後に、國策の爲には理論を都合よく活用すると批評される子・ケインズが登場してゐることは、邦国經濟道にとつては速度の早い進歩であらう。

邦国經濟の乗る道は、實際に存する自國の經濟狀態及び經濟動向の法則を主となし、従として世界の其等を加ふる。經濟事記が語る經濟狀態では國の自他が明白であるが、動向法則を説く經濟理論となれば、謬れる世界普遍觀に惑はされて自他を取違へる迂濶者が少くない。かかる履違ひを起すことは、これまでの經濟動向法則が固有名詞を冠する國家意志力の動きでなく、普通名詞で呼び慣らされた社會只然力の動きだからである。しかしこれとても紛れもなく國境を持つてゐる。社會只然力の動きも地物只然力の動きと等しく目的の無い無意識的運動ではあるが、二者の性格は全く異り、前者は社會を成せる多くの個人らの意志活動が競合する焦點に成立する。地震・台風の如き地物只然力の動きは全く人間意志力から獨立して發生するが、物価・景氣・失業の變転の如き社會只然力の動きは全く人間意志力から獨立せるものでなく、個人意志力が社會面に出現せしめる只然運動である。されば地物只然法則は人間の力にて消すことは出来ず、風の方向に帆を張るやうに巧にそれに乗るだけであるが、社會只然法則は個人意志に因るから、超個人的なる國家意志力を以つてこれを制御し、果てはこれを消失せしめるところまで往く。例へば社會の商品競争價格を國家の公定價格に釘付けする如き、或は貨幣制度の改正によつて惡幣は善幣に勝つと言ふ梅園法則・グレンシャム法則を打消すが如きがそれである。

経済生活において対物経済面では汎通人格の意志が地物只然法則に乗るが、世間経済面では世間人格の意志が個人意志又は国家意志として、特に後者が社会只然法則に乗る。只然法則を認識するだけでは、只だの物知りに過ぎない。これを知つてこれに乗る工夫と努力とによつて対只然力の認識が活かされる。対物経済面では対物技術学の依つて乗るべき地物科学の進歩に須つが、世間経済面では社会只然運動と国家意志活動との相互的消長が、乗つて進む道の成長いかんを決める。しかし国家意志力が安全に社会只然力を制し、果てはこれを解消する時節に到着することは、恰も各人がその只然性の衝動力を制し切つて全く自由の意志活動を為す聖者と成ることのやうに困難であらう。それにしても邦国意志経済が成長するにつれて、国家意志力が社会只然力を制し行く諸国の実例は大に注目すべきである。

邦国経済の道としての乗る道は、国家意志力が自主的方向を執り社会只然力の動く只然法則に乗つて働くことである。そしてかく働く間には国家意志力が社会只然力の動きに随応し、これを制御し、結局は部分的ながらこれを除斥するに到るまでに、その意志活動には諸階段の意志的動向法則を成立せしめる。これは社会只然法則に替はる国家意志法則である。これは斯くあるべしと指令して世間生活を規正する道徳・法律などの規範法則ではなく、同じ世間生活面にあつて社会只然法則と並んで国家意志活動の動向を跡づける事理法則である。これは事理法則としても地物只然法則や社会只然法則やと対称される意志法則であり、しかもその中でも汎通人格の活動する意志法則ではなく、世間人格の活動する意志法則であり、世間人格としても個人意志でない国家意志の動向法則である。只然法則は目的なき無意識的運動が、一定の原因力から起りて一定の結果態を生ずる因果関係の「力の動き」に成立するが、これと異なる意志法則は目的を懐く意識的活動が、一定の志向力から起りて一定の成績態を生ずる志續関

係の「力の動き」に成立する。二者共に或る「力の動き」が或る事態を生ずることの必定なるは同様であり、それで共に道理の法則と呼ばれるが、一は只然必定であり、他は意志必定なるところに相違が存する。只然力の動きは必然的に発し意志力の動きは自由に発すると言はれるが、これは二者が発動の動機性を異にする点となりて必定性の意味を異らしめるが、「力の動き」が法則性を持つことは同様である。然らばかかる意志法則の一たる国家意志法則は、邦国経済の道としてはこれを如何に処遇すべきか。

社会只然法則は個人自覚の發展、従つて社会の發展と共に、個人意志力の動きが競合する所に成立する。この法則が邦国経済において支配的となるとき、謂ゆる無政府的経済となる。これに対し国家意志力が邦国経済における国富の生成及び帰着に働きかけて、それが意志経済化するやうになれば、その践む道は是非とも社会只然法則に乗ることを必要となし、ここで正しく巧に乗るや否やが践む道たる経済国策の成敗を決める。そしてかかる意志活動にはかかる成績を生ずると言う意志的必定の志績關係に国家意志法則を成立せしめる。これは法則であるから無論、国家の経済計画や経済制度などを立てる践む道の方などとは別のものである。それであつてこの法則は国家自ら打出したものであるから、国家は邦国経済の道としては、これに乗るのではなく、これを承けて践む道を考案し決定するのである。

最近にはこの国も、緩急・淡濃の差はあつても概ね意志経済化して来たので、践む道たる経済国策の決定には、社会只然法則に乗ると共に、国家意志法則を承けてゐる筈であるが、経済學説の面にはまだその点がはつきりと表現されてゐない。行き方の可否については大に議論の存するところなるが、形相としては計画経済の先端を行くロシア邦国経済の説明についてすら、なほ社会只然法則を超えて出る国家意志法則の意義が高調されてゐない。ロシ

ヤの共産革命が勝利を得てから已に四十年、その間我々はこの新式邦国経済に注目して何か新しいものを發明して世界を驚かすのではないかと大きな期待をかけてゐた。しかしそれも始めて公共資本企業制を實施して近代産業の建設に成功し、後進国が先進国に追いついたと言ふことの外には、まだこれぞと言ふ新しい経済道を打出してゐない。四十年の成績を語るスターリンの「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」でも、ソ同盟科学院の「経済学教科書」でも、我等の期待してゐた国家意志法則については甚だ曖昧である。なぜここで国家意志法則が社会自然法則に替つて登場して来たことを堂々と強調しないのだらうか。思うにそれは西洋の社会科学が一種の自然科学として發展したものであり、殊にその一結晶たる唯物史観法則の自然性格に囚はれて、生産手段の所有に拘泥し国家意志力の自立を確認し得ない自縄自縛の思考から来たものであらうか。或はまたそれは今もなほ強制と自由との矛盾を包蔵し、むしろそれを強めてゐるところに、自然法則と意志法則とを交替させる進路に踏み切ることが出来ずに居るやうな、未熟なる国家意志力の致すところであらうか。

## 五、 踐む道

最後に挙げる邦国経済の踐む道は、これこそ最先きに着目される道であり、邦国生活において絶えず新たに考案され決定され実行される経済国策である。この道に根柢を授ける由る道と、基<sup>もと</sup>届<sup>と</sup>と目途<sup>めと</sup>とを与へる執る道と、可能実効を保証する乗る道との三つを具備して、ここに始めて踐む道を何とするかを思案する。四つの道はすべて主体性・具体性を持ち、我々は日本邦国経済の道を求めるが、その事は踐む道にあつては一点の疑をも容れない。

邦国経済の踐む道の要領とするところは、自国の国富生成を豊かならしめ国富帰着を普からしめるには、何を為

し如何に為すべきかの方策を決めることである。他の見地から言へば、それは自国の財貨需要と財貨提供とを、規模の拡大に應えつついかに適当せしめるかにある。ここでは近代経済学の眼目とする需要と提供との拡大的均衡の自然法則に乗つて行く。この踐む道の要領に照らして始めて、資本主義の改修か社会主義の採用かと言う経済体制の選択が問題となるが、この両体制共にもはや試験済である。そこで我等が体制問題を考へるに当つては、生産手段を私有とするか公有とするかと言ふやうな低級な所有人生観に囚はれてはならぬ。生産手段はこれを実際に生産事業に当れる者に持たせることとすれば事足る。我等の主たる関心は、生産者の人柄を見て、いかに人々をして悦び勇んで働かしめるかにある。日本邦族は古来高遠なる開化の道を信奉して、忍苦でない克苦の労働に勤め尽す勤勉性を養つて来た。この道に由拠しこれを活かす独自の経済体制を打出す経済国策を立てる外には何の妙案もない。邦国経済の踐む道として経済体制に次ぐものは、絶えず我等の頭を悩ましてゐる資源生産力を確保する国策である。労働生産力については内外に認証された我が邦族の勤勉性を基として、絶えず最新の技術を腕に持ち、その生産性の向上に努める方向をとればよい。この貴い邦族性を腐蝕せしめる輸入型の労働争議は、これを厳に回避しなければならぬが、それは当然に国風型の生産体制の創新に須つ。労働生産力に跛行して来た資源生産力を確保することを一目的とした大東亜戦争は敗れて国運を逆転せしめたが、運命は遅くつて来る。高度の技術は或程度までは動力と原料とを創作して人工資源を形成せしめる希望を持たしめ、また大東亜戦によつて開らけた独立国の未開発資源に近づき得る平和的な機会が展望される。かかる人と物との生産力を受けて国富の生成を豊かならしめる方途は、主として新生産体制にかかつてゐる。

人口多く資源不足する日本経済としては、生産と見合はず消費の面においても、日本独特の方針をとる国策を打



出して、我は我なりに国富の帰着を嘗からしめることが大事である。それは敗戦後に外から誘惑され、内に迎合してゐる、あの個人的幸福道を見事に撃退して、消費面でも生産面と同じく、享樂的消費を越ゆる開化的消費に眼を向けることである。この事はわが邦国需要と邦国提供との適當關係を保持する経済目的を達すると同時に、人心の腐敗を予防する為にも大切である。その点において我々日本邦族は、二千年間長く深い修養を積み重ねて来た筈である。古きを温ねて新しきを知れよ。

## 六、道 行 き

邦国経済の道としては、上述の四つの道が整はなければならぬ。それが整つたときに道調べが了つて道入りしたこととなり、それから道行きに出発する。道行きの道は外観では踐む道のみやうに思はれるが、実は然うでなく、道行きにも道入りにおいて取容れられた由る道・執る道・乗る道が悉く包含されてゐる。我等は由つて執り、執つて乗り、乗つて踐み、従つてまた由つて踐み、執つて踐むのである。

かかる実践の道行きが成功するや否やは、道の当否如何の外に実行の手際の巧拙にもよるが、また大に実践者たる国家意志の明暗・強弱いかに伴つてゐる。国家意志の賢明、殊に強力なるを嫌う者は個人主義者なるが、彼等は人生開化の大業の何たるかを知らず、それが国人によつて成されることを知らない。生涯を国人として始終することに飽き足らずと思う天才者は、世間人格ならぬ汎通人格の出世間的立場においてその才覚を伸ばすことが出来る。世間人格の一なる個人格に籠つて生涯を終ることは心淋しい限りである。世間生活において世界開化の道が全通するまでは、邦国開化の道が人生の最高階段に立つ。なほ世界開化の大道とても、所詮は諸邦国開化の合流以外

には別に何の源泉もない。

邦国生活の道は、直系としては自国道統の傳承を中道としてここから新たな道を發明する行き方の外にはない。これと共に傍系としては他国開化の珍種を移植して、これを国風に合うやうに改良するにある。この点において日本人は模倣者と惡罵されるまでに、古代ギリシヤ人と一対をなすほどに移植・改良の名人である。その外に全く愚かだつて悪い行き方は、自国にとつて大切な直系及び傍系の二つの開化作業を投げ棄てて、「我等の傳承は已に破産した」などと放言し、自国の道統を忘れて他国の道統に転向し、自国の其と他国の其とを代替させようとする無自主的な錯覚・迷信の盲動である。かかる迷信に限つて何の新味をも打出すことの出来ない万年学習をつづけるのみにて、それは邦国開化にとつて、広くは人生開化にとつて害はあつても益はない。邦国經濟の道について言うもまた然ふである。